

令和6年8月19日
(令和6年8月20日 一部修正)
令和6年度病害虫発生予報第5号

長崎県病害虫防除所長

【予報の概要】

農作物名	病 害 虫 名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
普通期水稻	いもち病 (穂いもち)	—	少
	紋枯病	やや多	やや多
	縞葉枯病	並	並
	トビイロウンカ	やや少	やや少
	コブノメイガ	多	多
	穂吸汁性カメムシ類	並	やや多
大豆	ハスモンヨトウ	並	並
いちご (育苗床)	うどんこ病	やや少	やや少
	炭疽病 (防除情報第11号継続)	並	やや多
	ハダニ類	並	並
アスパラガス	斑点性病害 (褐斑病、斑点病)	並	並
	アザミウマ類	やや少	やや少
かんきつ	かいよう病	並	並
	黒点病	やや少	やや少
	ミカンハダニ	並	並
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並
びわ	がんしゅ病	少	少
	灰斑病	並	並
	ナシヒメシンクイ	やや少	並
果樹共通	カメムシ類	並	並
茶	炭疽病	並	並
	チャノキイロアザミウマ	やや多	多
	チャノコカクモンハマキ	並	やや多
	チャノホソガ	やや少	並
	カンザワハダニ	やや少	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多
	クワシロカイガラムシ	少	少

【発生予報】 本文の () 内は平年値

普通期水稻

1. いもち病 (穂いもち)

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(72筆)の結果、葉いもちの発病株率は0.0% (2.4%)、発生圃場率は5.6% (26.4%)であった。

イ 8月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、葉いもちの発病株率は1.0% (11.7%)であった。

2. 紋枯病

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
- ア 8月前期の巡回調査（72筆）の結果、発病株率は1.6%（0.8%）、発生圃場率は11.1%（14.3%）であった。
- イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は40.0%（15.9%）であった。
- ウ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本病の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
- 粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 縞葉枯病

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠
- ア 8月前期の巡回調査（72筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率0.4%）。
- イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率0.0%）。
- ウ 8月前期の巡回調査（72筆）の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭（0.1頭）、発生圃場率は18.1%（44.1%）であった。
- エ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.1頭（0.2頭）、寄生株率は6.0%（18.3%）であった。

4. トビイロウンカ

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠
- ア 8月前期の巡回調査（72筆）の結果、株当たり虫数は0.01頭（0.03頭）、発生圃場率は5.6%（17.0%）であった。
- イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、株当たり虫数は0.1頭（0.3頭）、寄生株率は6.0%（19.4%）であった。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 今後の発生予測は別紙図のとおりであるが、本虫の発生は圃場間や同一圃場内でも偏りが大きい。このため、圃場の見回りを徹底し、できるだけ圃場全体の発生状況を把握して、防除を行う。出穂期以降の要防除水準は、株当たり雌成虫数が1頭以上である。
- イ トビイロウンカに登録のある殺虫剤の多くは卵や成虫への効果は劣り、幼虫、特に若齢幼虫期に散布することが一番効果を発揮しやすい。
- ウ 防除実施後もその後の発生状況に十分注意し、防除効果の確認を行うとともに必要に応じて追加防除を行う。
- エ 本虫は株元を好んで寄生するので、薬剤散布は株元に薬剤が十分に付着するよう丁寧に行う。
- オ 薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守するとともに周辺環境（ミツバチや水産動植物等）に配慮し、薬剤の飛散に十分注意する。

5. コブノメイガ

- (1) 予報内容：発生程度 多
- (2) 予報の根拠
- ア 8月前期の巡回調査（72筆）の結果、食害株率は33.7%（4.2%）、発生圃場率は95.8%（38.2%）であり、地域によって発生状況に大きな差があった。
- イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、食害株率は1.0%

(21.1%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

今後の発生予測は別紙図のとおりであるが、本虫の発生は圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、圃場の見回りを徹底する。薬剤散布は、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後、粒剤では成虫発生最盛期に行う。

6. 穂吸汁性カメムシ類

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 8月前期のイネ科雑草におけるすくい取り調査(25地点)の結果、捕虫網による10回すくい取り当たり虫数は6.8頭(9.0頭)と平年より少なかったが一部多発地点も見られた(表)。

イ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

種類別	10回すくいとり当たり虫数						発生地点率	
	R2	R3	R4	R5	平年	R6	平年	R6
ホソハリカメムシ	0.6	0.5	1.3	1.4	1.3	2.3	77.6	96.0
クモヘリカメムシ	1.0	1.0	0.5	0.5	0.6	0.7	43.3	64.0
シラホシカメムシ	0.1	0.1	0.1	0.2	0.4	0.4	47.7	56.0
アカスジカスミカメ	7.6	1.0	1.2	1.4	6.8	3.5	79.8	80.0
ミナミアオカメムシ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	12.0
イネカメムシ	-	-	-	-	-	0.0	-	8.0
計	8.6	2.5	3.1	3.5	9.0	6.8	96.3	100

注) 平年はH26～R5年の最大・最小値を除いた平均値

注) イネカメムシの調査はR6年から開始のため、過去や平年の数値はない

(3) 防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の飛来・増殖源であるイネ科雑草の除去等、圃場環境整備に努める。
 なお、水稻の出穂10日前以降の畦畔等の除草はカメムシ類の圃場内への侵入を助長するので避ける。

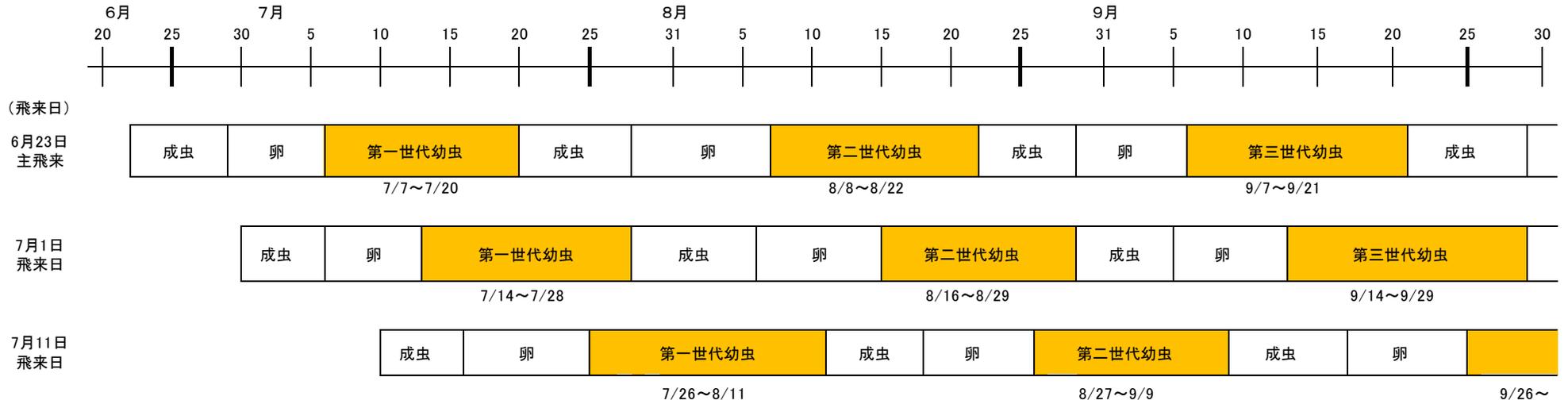
イ 防除時期は穂揃い期とその7～10日後の2回が基本である。

ウ 水田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布を行うと効果が高い。

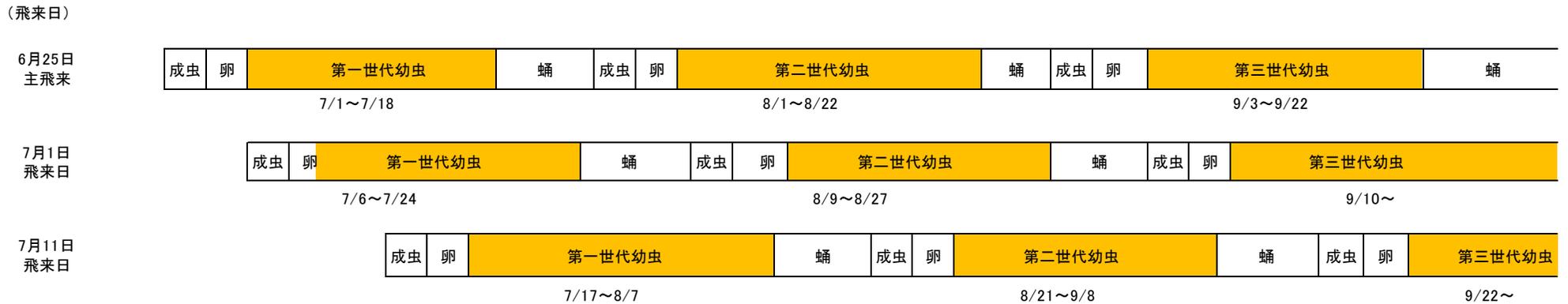
エ イネカメムシは出穂直後から本田へ飛来して吸汁加害するため、防除適期は出穂直後とその7～10日後であり、他の斑点米カメムシ類の防除適期と異なるので注意する。

オ 薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守するとともに周辺環境(ミツバチや水産動植物等)に配慮し、薬剤の飛散に十分注意する。

(図) トビイロウンカの発生予測図(令和6年)



(図) コブノメイガの発生予測図(令和6年)



※ 発生予測の気温は諫早市貝津町(農技セ)のデータを用いた(6/1~8/13実測値、8/14以降は1994~2023年の平年値)

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（9筆）の結果、幼虫の寄生株率は1.4%（2.6%）、株当たり虫数は0.2頭（0.1頭）、白変葉発生圃場率は55.6%（47.0%）であった。

イ フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は、平年並で推移している（図）。

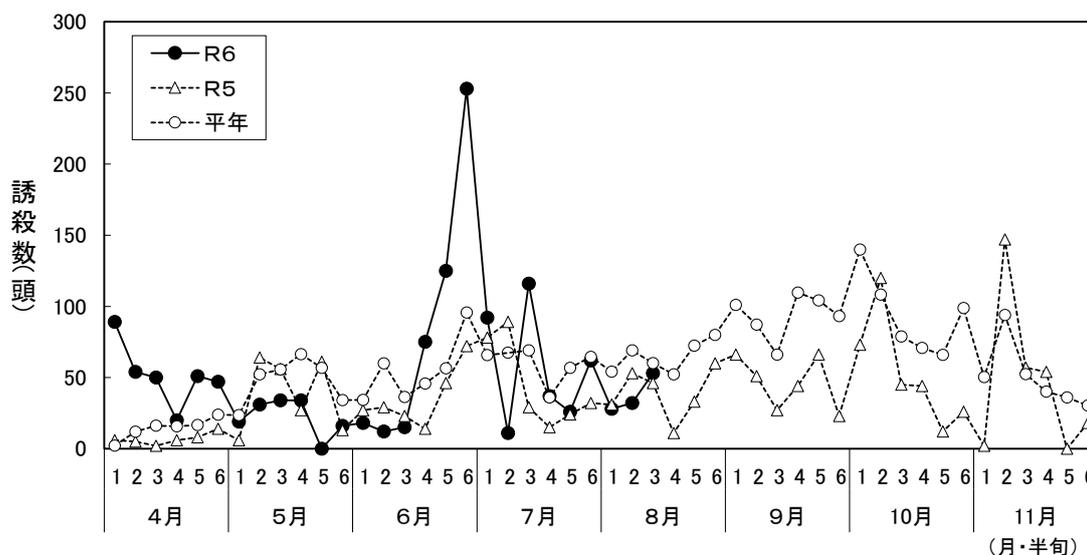


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況（諫早市小船越町）

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に薬剤散布する。

いちご（育苗床）

1. うどんこ病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（28筆）の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均発病株率0%、発生圃場率0.6%）。

(3) 防除上注意すべき事項

本病菌の本圃への持ち込みを防ぐため、定植前の薬剤防除を徹底する。特に「恋みのり」は「ゆめのか」に比べて葉で発病しやすいため留意する。

2. 炭疽病

令和6年8月2日付け病害虫発生予察防除情報第11号を継続。

なお、その後の発生状況については以下のとおりである。

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（28筆）の結果、発病株率は0.0%（0.2%）、発生圃場率は10.7%（8.8%）であった。

イ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本病の発生に好適である。

3. ハダニ類

- (1) 予報内容：発生程度 並
 (2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（28筆）の結果、寄生株率は15.6%（14.3%）、発生圃場率は57.1%（56.9%）であった。

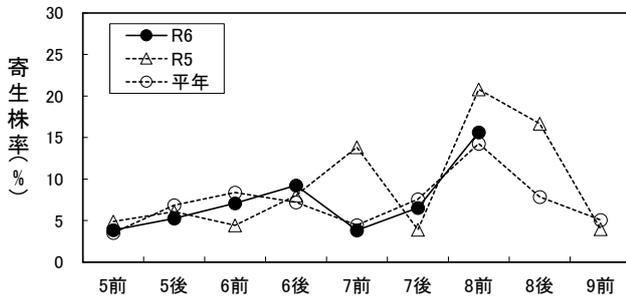


図 ハダニ類 寄生株率の推移

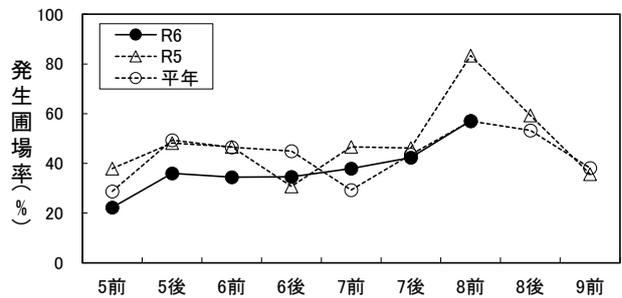


図 ハダニ類 発生圃場率の推移

- (3) 防除上注意すべき事項

- ア 本圃で多発すると防除が困難になるため、本圃へ持ち込まないように定植前の防除を徹底する。株冷・夜冷処理を行う場合は、入庫前に薬剤防除を徹底する。
 イ 下葉の裏に多く寄生するので、薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布する。
 ウ 古葉を摘葉後に防除すると効果的である。摘葉した葉を圃場内に放置すると周辺株へハダニが移動するため、速やかに圃場外に持ち出し密閉処分する。
 エ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病害虫防除基準 P218～221の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤を連用しない。薬剤は感受性低下の恐れが少ない気門封鎖剤を積極的に活用するが、卵に対する効果が低いので5～7日おきに連続散布を行なう。
 オ 天敵による防除を予定している場合は、薬剤によっては天敵に長期間影響を与えるものがあるので、薬剤の選択と使用時期に注意する。

アスパラガス

1. 斑点性病害

- (1) 予報内容：発生程度 並
 (2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（10筆）の結果、発病側枝率は9.2%（2.3%）、発生圃場率は70.0%（34.9%）であり、一部多発圃場が見られた。

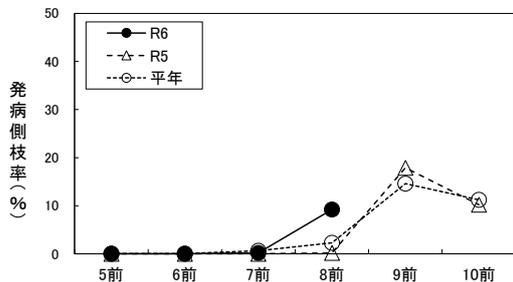


図 斑点性病害 発病側枝率の推移

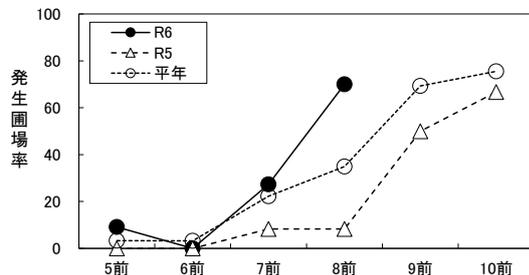


図 斑点性病害 発生圃場率の推移

2. アザミウマ類

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
 (2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（10筆）の結果、払い落とし虫数（10.5cm×22.5cm白色板に5回×10か所）は9.2頭（9.0頭）、発生圃場率は30.0%（68.1%）であり、一部多発圃場が見られた。

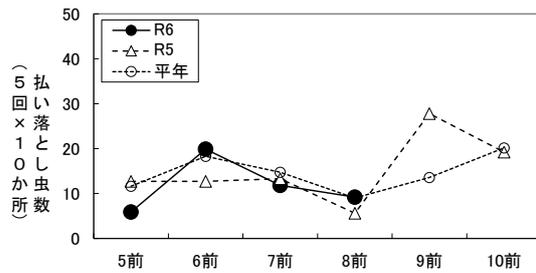


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移
※払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

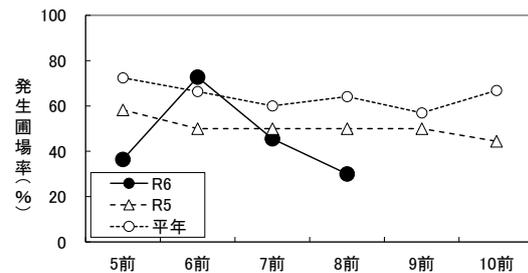


図 アザミウマ類 発生圃場率の推移

かんきつ

1. かいよう病

- (1) 予報内容：発生程度 並
(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（36筆）の結果、発病葉率は0.2%（0.3%）、発生圃場率は30.6%（17.0%）、発病果率は0.0%（0.2%）、果実での発生圃場率は13.9%（7.6%）であった。

- (3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の抑制には、予防的な薬剤散布が効果的である。強風を伴う雨が予想される場合には事前に銅水和剤の散布を行う。
イ 銅剤は高温期に散布すると薬害を生じることがあるため注意する。また、薬害防止のため農薬のラベルに従い、炭酸カルシウム水和剤（クレフノン等）を混用する。
ウ 感染源を減らすため、発病枝や発病果は除去し、圃場外に持ち出し処分する。

2. 黒点病

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（36筆）の結果、発病果率は0.5%（3.6%）、発生圃場率は16.7%（18.4%）であった。

- (3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後の気象（降雨）の推移に留意し、防除適期を逸しないよう努める。
累積降水量による防除間隔の目安は250～300mmである（マンゼブ剤の場合、令和6年長崎県病害虫防除基準参照）。
イ 臨機防除で薬剤を追加散布する場合は、各薬剤の使用回数に注意する。
ウ 枯れ枝が伝染源となるので、管理作業と併せて剪除する。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容：発生程度 並
(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（36筆）の結果、寄生葉率は6.8%（7.8%）、発生圃場率は30.6%（39.9%）であった。

- (3) 防除上注意すべき事項

- ア 盛夏期を過ぎて気温が低下してくると発生が増加するので、発生初期に防除する。
イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病害虫防除基準 P390～393およびP398～401の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

ウ 薬剤感受性が低下している場合があるので、効果の高い薬剤を選定する。具体的データについては、病害虫防除所ホームページのかんきつのミカンハダニ薬剤感受性検定結果を参照する。

4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（36筆）の結果、果梗部の被害果率は0.0%

（1.2%）、発生圃場率は8.3%（20.8%）であった。果頂部の被害果率は0.1%（0.2%）、発生圃場率は5.6%（4.5%）であった。

イ 黄色粘着トラップ（諫早市）において、8月以降の誘殺量は平年並～やや少ない。

ウ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

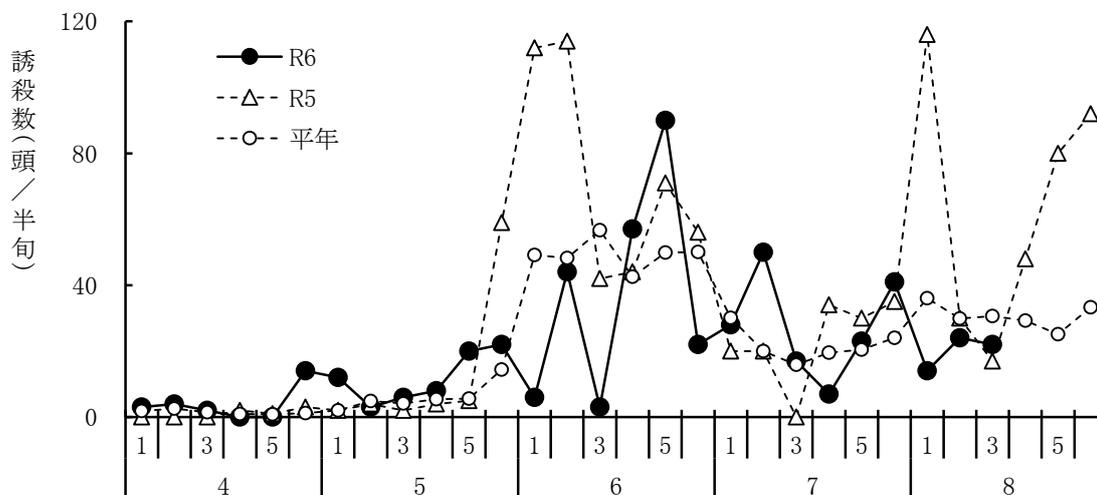


図 チャノキイロアザミウマの誘殺状況
（諫早市小船越町：黄色粘着トラップ）

（月・半旬）

※6月3半旬は一部欠測のため参考値

(3) 防除上注意すべき事項

ア 気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した発生ピーク予測日を下表に示した。

表 有効積算温度計算シミュレーションによるチャノキイロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日
（令和6年8月19日時点）

地点	長崎	佐世保	口之津	平戸
第7世代	8/26	8/27	8/29	9/13
〃（平年）	9/6	9/8	9/7	9/28
〃（前年）	8/28	8/28	9/1	9/11
第8世代	9/13	9/14	9/16	10/8
〃（平年）	9/26	9/29	9/28	10/30
〃（前年）	9/14	9/14	9/19	10/2
第9世代	10/4	10/2	10/9	11/19
〃（平年）	10/22	10/27	10/22	-
〃（前年）	10/9	10/7	10/10	11/4

注1：発生ピーク予測日は気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した。
なお、積算には2024年8月18日までは観測値を、以降は平年値を使用した。

注2：同一地区内でも、山間部では発生ピーク予測日が異なる場合があるので注意する。
また、今後の気象条件により予測日は前後する場合がある。

注3：表中の発生ピーク予測日の5日前から発生ピーク予測日の期間に薬剤散布をすると防除効果が
高い。なお、発生が多い園では、1果当たり寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

イ 茶、かき、ぶどう及びイヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

びわ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（10筆）の結果、発生を認めなかった（発病枝葉率 0.7%、発生圃場率 20.0%）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は樹体の傷口から感染するため、芽かきやせん定作業時はできるだけ断面（傷）が小さくなるようハサミを用い、作業後は速やかにペースト剤の塗布を行うなど、断面の癒合を促進する。

イ 感染予防のため、整枝・せん定後や強風を伴う雨が予想される場合には、カスガイシン・銅水和剤などの散布を行う。

ウ ナシヒメシンクイの侵入口は感染経路となり、また病斑部にナシヒメシンクイが食入すると感染が助長されるため、本虫に対する防除も併せて行う。

2. 灰斑病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（10筆）の結果、発病枝葉率は12.0%（18.7%）、発生圃場率は100%（92.5%）であった。

3. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（10筆）の結果、発生を認めなかった（寄生枝葉率 0.1%、発生圃場率 3.8%）。

イ フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は平年並～やや少ない（図）。

ウ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

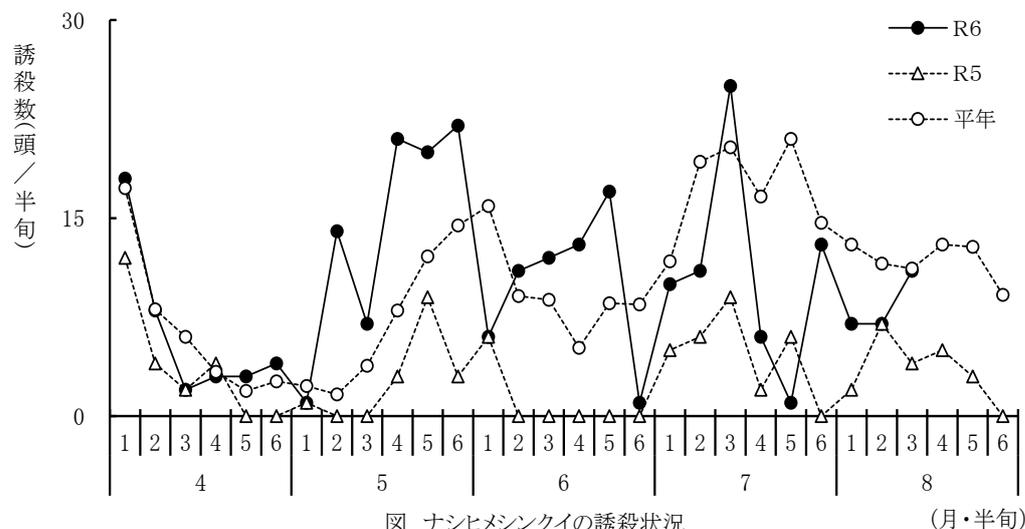


図 ナシヒメシンクイの誘殺状況
(諫早市小船越町:フェロモントラップ)

果樹共通

1. カメムシ類

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

ア フェロモントラップ（諫早市、西海市）の誘殺量は、平年並～やや少なく推移している（図）。

イ 予察灯（諫早市、南島原市、五島市）の誘殺量は、概ね平年並で推移しているが、一部地域で増加している（図）。

ウ 7月下旬に実施したヒノキきゅう果のビーティング調査の結果、1枝当たりの寄生虫数は1.2頭（1.8頭）と平年よりやや少なく、県内14地点のヒノキきゅう果の平均着生程度は2.3（2.8）と平年よりやや少ない。口針鞘数調査によるヒノキからの離脱時期は、概ね平年並と考えられるが、きゅう果の着生程度が低い地域では、やや早くなる場合も考えられる（令和6年8月2日付け**病害虫発生予察技術情報第2号**参照）。

エ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みである。高温・乾燥が続く場合、ヒノキきゅう果の劣化が急速に進み、ヒノキからの離脱が早まる場合がある。

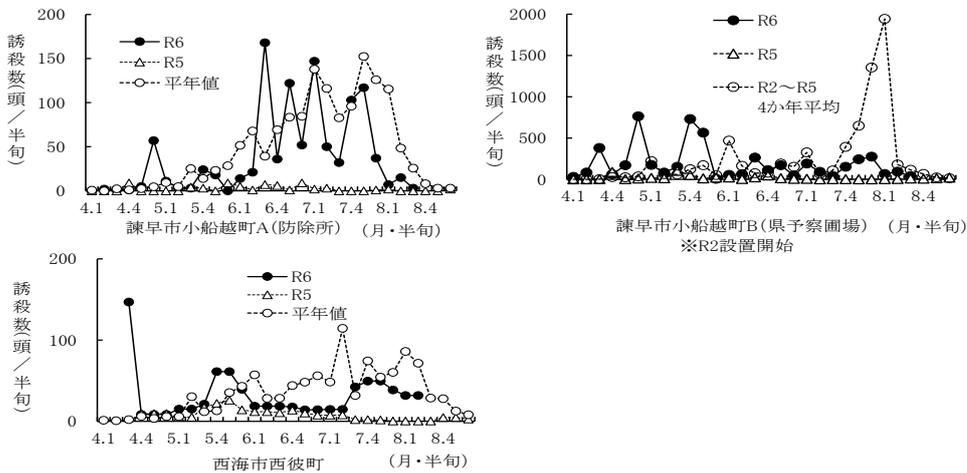


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネコール)

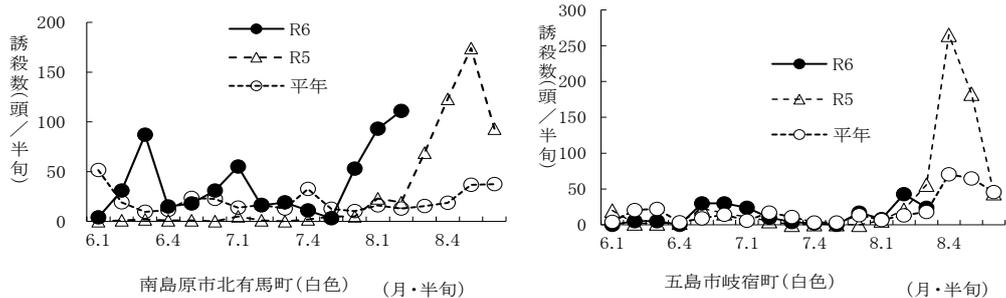
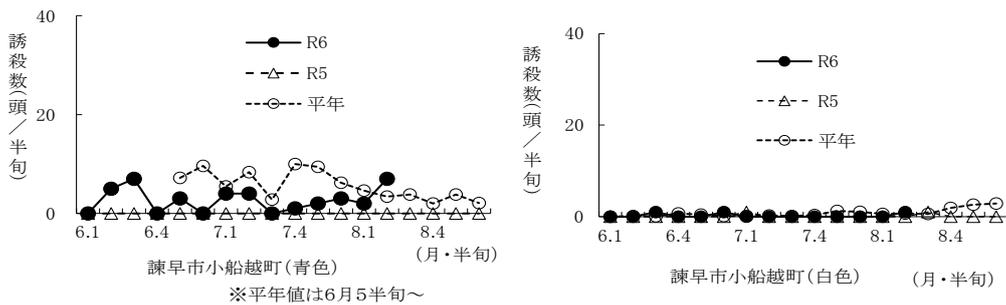


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ類誘殺状況(予察灯;白色、青色)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 飛来時期や飛来数は園によって差があるので、こまめに見回って早期発見に努め、飛来を認めたら早急に防除する。山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいため注意する。
- イ ハウス栽培では、開口部を防虫網（4mm目以下）で被覆し、侵入を防ぐ。また既に被覆済みのハウスでは、防虫網の破損がないか点検・補修する。
- ウ カメムシ類の活動は日没前後から活発になるため、薬剤散布は夕方あるいは早朝に行うのが効果的である。
- エ 合成ピレスロイド系薬剤を連用するとミカンハダニが急増することがあるので注意する。
- オ 特に収穫時期の近い品目は、薬剤散布時期に注意し使用基準を遵守する。また、周辺環境を十分に確認し、ミツバチを含め周辺動植物等への飛散等の影響がないよう十分注意する。

茶

1. 炭疽病

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠
8月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡当たり発病葉数は1.6枚（3.4枚）、発生圃場率は91.7%（63.8%）であった。
- (3) 防除上注意すべき事項
薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病虫害防除基準 P430～431の「作用機構による分類（FRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

2. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容：発生程度 多
- (2) 予報の根拠
ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は45.2頭（28.4頭）、発生圃場率は91.7%（93.8%）であった。
イ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病虫害防除基準 P432～435の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

3. チャノコカクモンハマキ

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡あたり巻葉数は0.5枚（0.4枚）、発生圃場率は33.3%（13.6%）であった。
イ フェロモントラップ（東彼杵町）による誘殺数は平年よりやや少なく推移している（図）。
ウ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤（IGR剤）は発蛾最盛期のころ、その他の薬剤は発蛾最盛期の約7～10日後である。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病害虫防除基準 P432～433の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

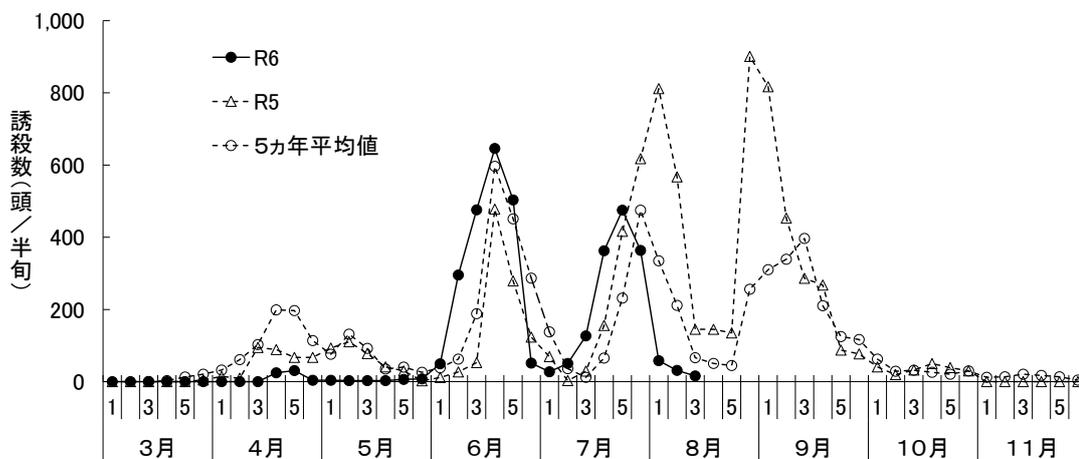


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況(東彼杵町:フェロモントラップ) (月・半旬)
※茶業研究室調べ

4. チャノホソガ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、発生を認めなかった（1㎡あたり巻葉数 0.1枚、発生圃場率 7.6%）。

イ フェロモントラップ（東彼杵町）による誘殺数は、平年並で推移している（図）。

ウ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

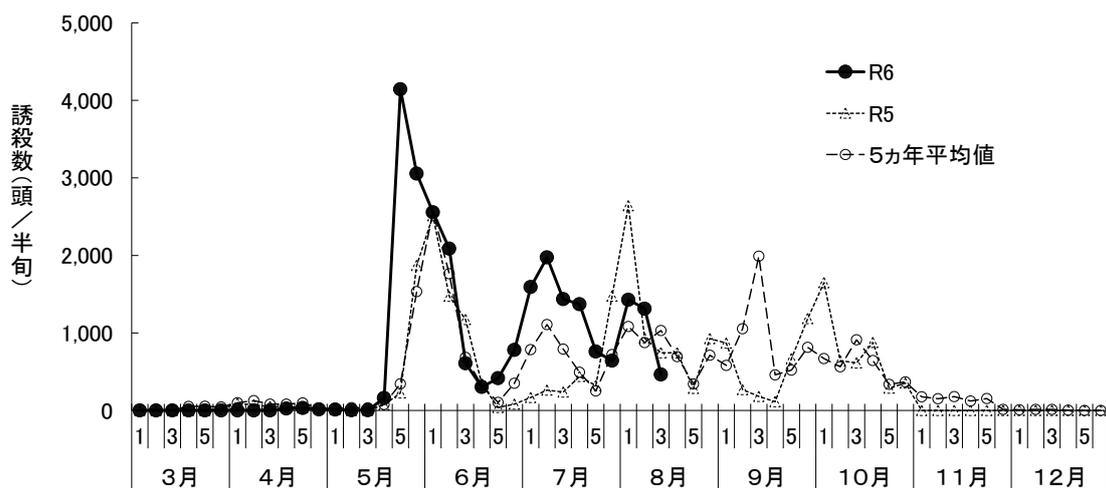


図 チャノホソガの誘殺状況(東彼杵町:フェロモントラップ) (月・半旬)
※茶業研究室調べ

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤（IGR剤）は発蛾最盛期のころ、その他の薬剤は発蛾最盛期の約7～10日後である。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和6年長崎県病害虫防除基準

P 4 3 2 ~ 4 3 3 の「作用機構による分類 (I R A C)」参照) の薬剤は連用しない。

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(12筆)の結果、寄生葉率は0.2%(0.8%)、発生圃場率は、8.3%(16.5%)であった。

イ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和6年長崎県病害虫防除基準 P 4 3 2 ~ 4 3 5 の「作用機構による分類 (I R A C)」参照) の薬剤は連用しない。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(12筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は2.4頭(3.0頭)、発生圃場率は58.3%(57.1%)であった。

イ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和6年長崎県病害虫防除基準 P 4 3 2 ~ 4 3 5 の「作用機構による分類 (I R A C)」参照) の薬剤は連用しない。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査(12筆)の結果、寄生株率は0.4%(4.2%)、発生圃場率は8.3%(29.2%)であった。

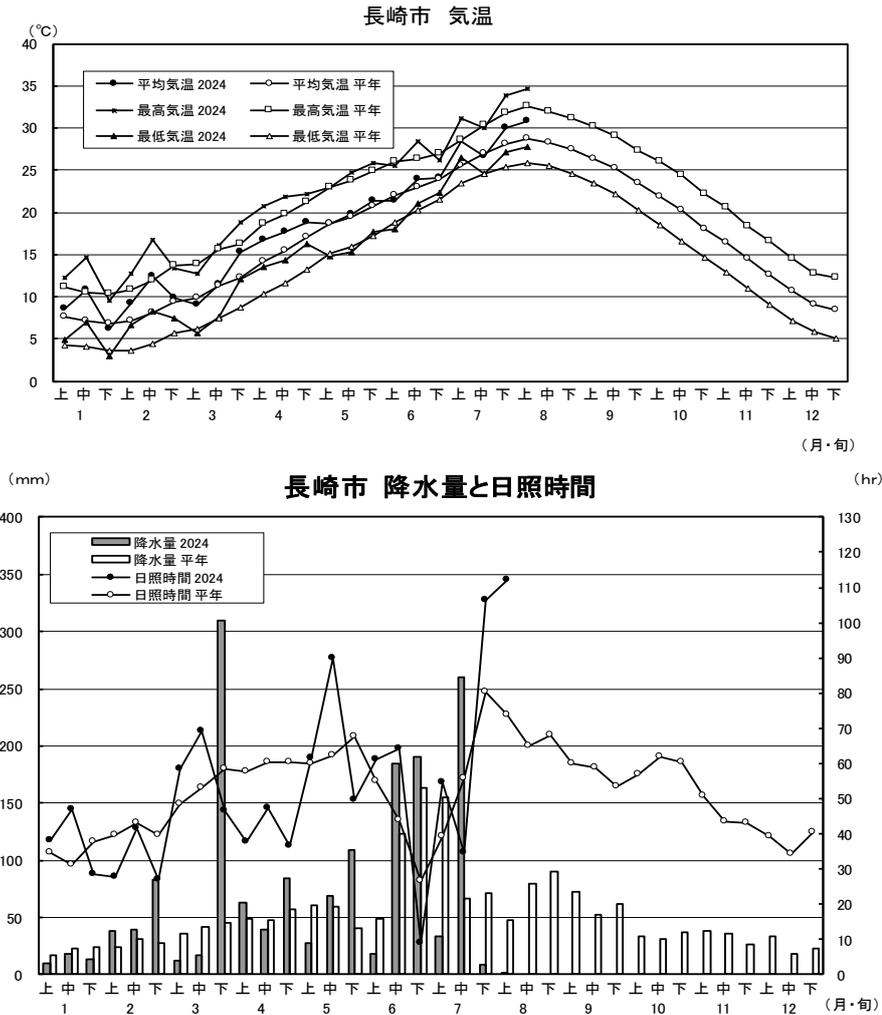
【参考】

(令和6年8月15日発表 1か月予報 福岡管区气象台)

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	10	80
降水量	30	40	30
日照時間	20	40	40

※予報対象地域：九州北部地域

令和6年の気象経過(長崎地方气象台)



- 6月から8月までの3か月間を「農薬危害防止運動月間」と定め、農薬事故を防止する運動を実施しています。
- 長崎県病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。
「長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室 (長崎県病害虫防除所) ホームページ」アドレス

: <https://www.pref.nagasaki.jp/e-nourin/nougi/JPP/index.html>

- この情報に関するお問い合わせ
長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室
(長崎県病害虫防除所) TEL : 0957-26-0027

